

2

特 244

732

思想研究所調査

英・米の弱體を覗く

國際思想研究所版



0009549-000

特 244-732

英・米の弱體を覗く

國際思想研究所・調査

國際思想研究所

昭和 17

ABJ

持 244
732



次

弱體を覗く



英・米の弱體を覗く

國際思想研究所調査

・昨年十二月八日、對英、米宣戰布告の大詔渙發を見るや、皇國陸海軍の精銳は、赫々たる戰果を太平洋及び印度洋に擧げ、英、米の持つ武力に潰滅的の大打撃を與へて、日本に對する世界の評價を根底から一變せしめた。亦、卓越せる民族の精神的緊張力は、彼等の野望による世界制覇の實力について、不當な危懼を一掃し、大東亞戰の捷利が、吾等の戰意の弛がざる限り、確實なものと信じて差支へなきものにしたのである。この點、民族精神の自覺に於て一段の開明を見たを謂はねばならない。が、この機會は亦、勝利者の立場について反省をも要請する。若し、日本が大東亞建設の理想を實現したとき、世界史の革新を如實に見るも、これは偉大なる戰捷の結果なるがた



め、凡ゆる恣意、慾望の遂行をも可能とする實力の把握ともなつて、運命分岐の素因がこゝに胚胎するとも言へるのである。吾々は、所謂デモクラシイ國家群の内部組織に包藏さるゝ弱體をこゝで探究すると共に、今後の反省の資料とするのも無駄とは言へないのである。

今日、崩壞の兆尤も凶々しいのは英國である。當局の口頭如何にも自負、自信に満てる言辭を弄するも、内心に於いて崩壞の必然を認識させられ、深刻な苦悶は狂燥の足搔きとなつて現はれて來た。

然らば英國をしてこの窮境に追込んだものは何んであらうか。それは、内部的に既に崩壞の運命にあつた國內機構をその儘、臨戰體制の基幹に持込んで大戰に突入し、樞軸側の果敢な痛打に遭ひ脆くも弱性を露呈したためと言へる。

左にその參戰前の國內情勢を概要摘記すると、

一、英國が産業革命以後招來した社會不安の顯著な現象の一つとして、所謂新興財

閥派の勃興を見、これが、舊來、比較的健實な愛國精神をその傳統に保持し來つた舊地主派と對抗し、その間に劇しい争闘を展開し初め、英國民への影響として、政治的現象に於いては、政黨がその存在を確立する必要から、金權と密接不離な關係に立ち入つたこと。尤も、その間、保守黨と言つた理想主義を標識する政黨の介在を見たが、勢力甚だ微弱にして殆んど放浪的性格に終止し、遂ひには射利的な政黨との合併を餘儀なくされてしまつた。

一、これを經濟的發展過程に見るとき、産業革命以後の急激な都市の發達は、人口集結を促進する情勢をつくり、更に、その旺盛なる工業力が地方的手工業組織を蹂躪し去つて農村衰亡を招來し、斯くして、英國は食料政策に關しては、國民生活に第一義的重要性を持つ農産物を輸入と言ふ海外依存の方策に依據せざるを得なくなつたこと。而して、都市に集結を見た農民の生活は徒らに都會商人の陷穽に陥ちた悲惨なものであつたのである。

一、英國が誇る自由主義の性格は本質に於て雇傭者に對する低廉なる賃金と食料の給與を建前とするが故に、その理念は労働階級へ搾取行爲と労働強要の容になつて現はれる。而して、この主義の謳歌は一時的傾向に止ることなく、永續を希ふ所から、飽くなき野望と化し、全世界到る處に低廉なる資源を發見し、高率な利潤を貪るに勉めた。これは、自然、國際資本の投資を誘致し、猶太財閥をその組織内に擁して世界制壓を目指して、障害たる國家社會主義の粉碎に邁進することになつた。

一、この傾向は勢ひ労働者の團體的反抗運動の誘發となり、劇しい勞資間の闘争の展開を見、その結果は資本の國內投資を稀薄ならしめ、著しい資本主義の國際進出を見るに至り、國內産業の衰微を招來したこと。等々である。

然るに、政治家はかゝる崩壞の凶兆に目を蔽ひ、何等彼等の負はされた崇高なる義務を履行しやうとせず、依然、國民の經濟生活の上には解決も、妥當な融合もなく、

政治の惠澤からは機會を奪はれ、愛國主義も資本主義も異名同義のものとしてイデオロギーの混亂に陥つたのである。

これに對し、政府當局の政治問題の取扱ひ方が亦、過誤を犯すのみに過ぎなかつた。これを農業方面に見ると、その保護政策は已に數世紀に亘つて繼子扱ひの容で、統計に現はれた農村衰微の狀況はたゞ没落への過程を辿る許り、開墾上の放漫放機は到る處に見受けられ、農民の生活は悲惨となり、これがためヨークシエア地方では革命運動の氣配さへ濃厚に見受けられたのである。

重工業方面に於いても亦同一の事が言へる。その顯著な例は炭坑問題であるが、一九二一年のストライキに端を發した當局の政策に對する不満の叫びは、更らに一九二六年の暴動となつて、莫大な市場の喪失を招來すると共に、一般産業界に大きな衰微の暗影を投じたのである。その真相は國內鑛業からの利得が採算割れのところから、ポーランド炭坑維持に向つて大きく投資しその過當の利潤を貪らうとした點にある。

その他、ランカシャ織物工業、船舶業、鐵道事業に就いても、デモクラシイ没落の影が濃厚であつて、而してこの段階が、その儘、今次大戰の英國戰時經濟の基本の形態となつてゐる。

さて、これが今次大戰の累次の敗北と多量の戰時物資の消費によつて、如何なる打撃を弱體の上に持込んだかを看ると、第一に國內の生産力に非常な不足を來たすと共に、外地屬領植民地に對する態度が從來より苛烈となり、徒らに物資金の搾取に汲々とし、而して、その反對給付を怠るため、外地をインフレーションの窮地に追込み、抗戰經濟力の低下を見てゐるのである。更らに、彼等の外地に於ける「富」の蓄積、詰り海外投資の部門は、今次皇軍の昭南島攻略によつてその金融支配力の上に甚大な影響を受け、この上もし日本の印度洋制壓が完全となり、合せて、濠洲、ニュージールランドが抗戰紐帶から落伍すると豫想せば、その損失は、英國の對外投資總額の約五割に當ると言はれるのである。

亦、日本のこの重壓は單に彼が持つ經濟抗力を弱めた許りではない。外地にある住民の從來の英國への信賴感を拂拭し去ると共に、遂にその弱體に突込む體の性根を植付けたのである。

その例解は、今次の英印會談決裂の狀況に窺ふことが出来る。そもそも、英國をして對印政策の轉換を餘儀なくせしめたものは、日本の赫々たる戰果であつて、會談に提出された英國の最後案は從來のそれとは雲泥の差をみる程、英國側の最大限度の讓歩を示し、略ぼ印度側の要求を満たし、外地に臨む案としては強ち批難を受く可き性質のものと言へないのである。従つて、印度側指導者間にあつても妥協の色漸く動くものあつたのであるが、而かも、それが決裂を見たと言ふのは、形式的には兎に角、民衆の對英信賴感の喪失から來る新たなる反感が會談を牽制した事に與つて力あるのである。

英印關係の將來の斯く暗澹たるを偲ばせるものあるとき、これと形影相伴ふが如く

に、英國のイラン、イラク方面の勢力もソ聯の驅逐に遭つて自屈的弱性を暴露してゐる。

勿論、この事は大東亞戰に於ける英國の敗退が、印度の危機を呼んだのと、アフリカのリビヤ戰線に對する第二次進撃が再度失敗した結果、イラン、イラク方面に於ける英、蘇兩國勢力關係に變化を來たし、昨年八月の勢力圏劃定に新たなる調整を必要としたからの事で、これが最後の意味を持つか否かは、今後の客觀的情勢の變化から來る判斷に俟つ可き所であるが、併し、これにより、英國は本國と印度を結ぶ線と印度防衛に必要なこれら地域の支配及びペルシャ灣の掌握が不可能の状態に立入つたことは事實であらねばならない。

その上、北アフリカ、西亞細亞にあつて、獨伊側勢力東漸の防衛に當つてゐた東地中海の英國海軍力が著しく弱体化され、シチリヤ海峽は完全に樞軸軍の制壓するところとなり、亦、英國西亞細亞軍の根幹部隊を形成して、同方面の武力支配の中樞力であ

つた印度兵及びアンザック軍が各々本國の事情によつて引揚げざるを得なくなつたため、抗戦力の低下となり、英國勢力の後退を決定的にしてゐる。

イラン方面の情勢と相關的に一考を必要とするものに、土耳其との關係に於いて英國勢力の消長如何といふ問題がある。土耳其は現在、自國を圍繞する列強諸勢力の虎視から中立政策を採つてゐるが、これは、極めて現實的外交方針を意味するもので、随つて、即時に四圍の情勢に對應する意味で頗る敏感に獨伊、蘇、英の勢力關係の消長を外交方策に反映するのである。

即ち、獨伊のバルカン制定が完成した後は、イタリア軍のアルバニヤ進駐から近東方面に對する脅威に備へ、嘗つて、英佛と結んだ條約に盛るその中立性を放棄し、詰り、イラン、イラクに侵入した英軍勢力のそれよりも獨軍の方を重く見てゐるのである。加之ふるに、大東亞戰に於ける英軍の敗北は、同國の從來の英國軍の武力に對する認識を一變し、世界戰局情勢の判斷に於いて、英國の沒落を認むる傾向が濃厚に

なつたのは確かである。

この情勢はこゝに亦、可能性ある臆測を促がすのである。それは、今次獨軍夏季攻勢のケルチ奪還に端を發した今後の獨軍の銳鋒が若し經濟的企畫のもとに、ウクライナよりコーカサス作戦に入り、更に南下してソ聯の重要防戦資源力を獲得の上、トルコをその重壓から救拔して樞軸側への加擔を約せしめた場合、樞軸軍の手によるスエズ制壓は易々たるものあるでなからうかと言ふのである。以上に於て、大體、東亞に於ける英國の弱勢に考察を拂つた積りだが、最後に、この敗勢の責任の一部を負擔する英國陸軍の武力に就いて觀察を加へてみる。

英國陸軍は、その創設の歴史に照らしてみて解る如く、傭兵の集團で、その存在の意義は、單に武裝せる警備團の一種として、國內の安寧維持に當るか、或は、外地植民地に對する脅迫の具に供するものに過ぎない點にあつて、到底、國家の防衛力として、その興廢の運命を擔負して、外敵と堂々攻防の陣を布くと言ふ譯に不可ぬもので

ある。尤も、今次大戰に當つて、再び徵兵制度の採用を見て、表面、國民軍の形態を備へた譯であるが、自覺に於て從來の本質を失はないのである。

それに、英本國の總人口が、列強國の一つとしては人的資源に貧弱であるため、七つの海に互る全屬地、植民地の防衛に當る武力としては數に於て不充分である。隨つて當然外地兵力の協力に俟つ所ある譯で、所謂アンザツク軍、印度兵、南阿軍がそれであるが、かゝる機構は本國兵をして植民地軍に對し督戰者の地位に置くことになり總て、外地軍の犠牲に於てのみ戦ふ結果となるのである。今次、マレー及びジャバ島の敗戦の結果にみる指揮官達の最後の逃避行爲も、その戦争觀の現はれで、自らは、戦争の負擔を決して負ふてゐないのである。

次に、アメリカの臨戦體制に就き弱性を検討してみよう。

そもそも、アメリカは、今次大戰に参加す事前の國內情勢に於て思想的方面にある混亂を呈出してゐた。これはデモクラシー奉持國一般に見る通例であるが、特にアメ

リカは性格からして極端な言論尊重の國柄だけにそれが甚だしく、その上、諸人種混
 淆世帯で、所謂民族の純潔性を缺く所から、獨系、伊太利系、ロシア系のアメリカ人
 はそれぞれ早くもナチス、ファシスト、コミンテルンへの同情を表現し、それが又、
 民衆の、貧富の懸隔甚だしき經濟上の社會的地位不安の状態と相俟つて、デモクラシ
 ー組織を希望薄き非効力的な存在と考へ、同時に、歐羅巴に於ける獨裁政治の成功に
 魅了されて、參戰前已に彼等への抵抗の意志を放擲す可しとする者が多かつたのであ
 る。其處へ持つて來て、今次の參戰目的と云ふものが明瞭を缺く故に大衆に徹底して
 ゐないのである。

かるが故に、今日、彼等の抗戰意識なるものが、どの程度強烈なものか甚だ疑はし
 い。その例は、過般の勞働時間延長法案が下院に於て慘めな敗北を喫した事に見ても
 解るが、この法案阻止には從來犬猿も只ならぬ間柄にあつた勞働總同盟派と産業組織
 會議が緊密な提携のもとに共同戰線を張つたと言はれる。

勞働運動の擡頭は抗戰意識との關係を慮外に置いても戰時下米國軍需工業自體に現
 はれた社會不安として當局の焦慮を購ふものであるが、それが、大戰勃發と共に俄然
 その度合を濃厚にして侵蝕を擴大してゐるのである。

この勞働運動は所謂全國勞働關係法の上に立つた合法的行動でアメリカ憲法の認容
 する所のものであり、且つ、ルーズベルト政権が今日まで維持出來得た裏面には、こ
 れら勞働團體の絶大な支持があつたため、従つて俄かにこの罷業に對して彈壓を加
 ふることは何れにしても不可能に近いのである。當局もかゝる狀況の續く限り、到底
 樞軸側との對抗は困難であらうとの悲觀的言葉を吐いてゐる。従つて、現在の所、ア
 メリカの戰時生産は當局の發表した案の通りに進捗を見てゐないのだ。

この、計畫の進捗を阻むものに、更に、勞働力の不足といふ問題がある。中でも、
 熟練工の不足は刻下緊急の問題として當局に取擧げられ、その對策として大掛りな勞
 働訓練に乘出したが猶ほ間に合はず、最近に至つては婦女子をも戰時生産方面に雇

することを試みてゐる有様である。

次に、失業問題と重要軍需資材の不足であるが、失業問題はアメリカが参戦以前に已に國內に於て勞資對立の問題と共に大きな癆を形成してゐたのであるが、當局はその治癒を見ぬまゝに大戰に突入したのである。尤も、軍需生産業の擴大によつて、その半數は救済を見たものゝ未だ社會不安の一現象となるを失はないのである。軍需資材の不足に就いては、資源を誇るアメリカとしては皮肉に聽ゆる言葉であるが、戦争に直面してみると矢張りこれが當面の問題として現はれて來るのである。從來、アメリカがマレー方面から輸入を仰いでゐたゴムその他の重要資材が輸入杜絶を見たのはその顯著な事例であるが、その他、一般金屬類の使用に至つては昨今頻りに統制を加へられてゐるのである。

これと關聯して、アメリカ参戦以來の敗北が招來した海外市場の喪失から、國內に新しく農業不振の問題を惹起してゐる。

元來、アメリカは農産の總産額から見て、世界屈指の農業國であることは周知の通りで、殊に小麥、棉花に至つては最高の地位に置かれてゐたのであるが、最近、これが海外市場への賣捌きは殆んど不可能に陥つた。而して、これが窮境打開として出路を南米諸國の市場發見に求めるのであるが、併し相手國も農業國であることからして、到底、協力の面は期待すること不可能なのである。自然、此處に農産物の生産過剩を來たすと共に、價格は下落し、當事者に大きな苦悶を與へてゐるのである。

以上の概觀に依ると、アメリカ抗戦力に就いてある限界線を感じるので、隨つて、その参戦の重要意義の一つであるところの軍需品の多量生産に依る援英、援ソ、援蔣の爲めの資料提供とか、彼自身の爲めの報復の企畫とかは、計畫だけで、その儘の實現の可能性には頗る疑はしいものがあると言はねばならぬ。況んや、歐、亞を通じ、樞軸軍の戦果が、迅速果敢に擴大されて行くのと照合するとき、その悠長さに失笑を禁じ得ないものがある。

序いでに、戦争の表面を擔當するアメリカ陸軍に就いて一言すると、その策戦を指導する首脳部に至つては、人材の拂底と素質の貧困に於て、致命的缺陷があると言へる。又、陸軍勢力としての常備軍が、今回の強制徴兵法に依つて、これまでの三〇萬から二三〇萬迄の増強を見たが、これも、如上の首脳部の素質と引合はせて、何等、新兵器、新兵術による進歩した訓練を施されて居らず、その効果には見る可きものなしと言はれる。新時代の戦争の本質を捉へる點に就いて、首脳部は無爲に近いのである。

同様のことは海軍に就いても略ぼ言へる。が、これはその上に、ハワイ眞珠灣の海戦から引續く珊瑚海の敗戦で、大量の船艦を喪失して終ひ、今では、如何にヴィンソン案、スターク増強計畫に拍車をかけて見ても間に合はぬ状態である。これを既定計畫の中に見ても、戦艦で建造中のもの八隻、未起工のもの七隻、航空母艦では建造中二隻、未起工九隻である。その進捗状況も敗戦の結果、輿論に猛烈な非難がある上、工

場に罷業を見たので豫定通りの實現はどうかと言はれる。又、假りに實現を見ても、大平洋の根據地を殆んど奪はれた今日、吾等にどれ程の脅威を與へるかは疑問で、更に、乗組員を如何にするかを考へた時、愈々問題であると言はねばならない。

最後に附言して置きたいことは、アメリカ戦時政策の裏面にはこれを操縦する覆面の一團があり、其處に猶太財閥の巨頭達が傲岸に構へ戦時利得を目的に凡ゆる軍需生産部門に暗躍してゐる事實に就いてある。

かゝる事は、何も今次大戦だけに見る異例でなく、前歐羅巴大戦に於けるモルガン商會の醜聞は衆知の事實であるが、今回も亦、武器貸與法の通過を契機に、同様の役割を演ずるに彼等は熾烈な活動を始めてゐる。

その重なる舞臺は、大軍需會社、製鋼會社、航空機會社、戦争物資購入、及び、聯合國へ戦争資材引渡の管理人の地位に於て、完全に指導權を掌中に握つてゐるのである。

424
243

其他、戦争挑発の宣傳方面にあつては、アメリカ國民が街頭に讀まされる愛國的熱情と宣傳ビラ、狂熱的な、大學教授達の煽動演説、或は又、日常の新聞紙上に閲讀するカーネギー研究所の反樞軸性を覘つた科學研究記事等々は、悉く彼等一派の操縦にかゝるものと言はれてゐる。斯くて高等金融資本家達が戦争宣傳の主演者として蜚集してゐることは、記憶しておいて宜いことである。

昭和十七年五月廿九日印刷
昭和十七年六月二日發行

(非 賣)

著者
行人者

水島 齊

印刷人

東京市麻布區筆筒町六七
糸川 東洋男

印刷所

東京市芝區三田四國町二ノ二五
嘉屋 印刷所

發行所

東京市澁橋區柏木一ノ四八
國際思想研究所
電話澁橋(37)一七二〇番
振替東京三三〇一一番

